

(国語)

「学び合い、深め合う児童の育成」 ～伝え合う活動を通して～

大阪市立桃陽小学校 中山 加奈子

1. 研究主題設定の理由

動画配信サービスや SNS を使って、個人で学ぶことが容易になった時代にあつて、個性も環境もさまざまな児童が顔を合わせて学ぶ「学校」だからこそ、できる学びとは何だろうか。それは、一人一人の児童が「言葉」を使って考えをもち、表現し、交流することで育まれる「新たな自分」ではないかと考える。1 分前の自分が考えもしなかったことを、友だちの意見を聞いて、今の自分は考えている。1 週間前の自分にはできなかったことが、友だちのアドバイスによって、今日の自分にはできている。友だちが、自分の意見をうなずきながら聞いてくれて、自分の言葉に自信がもてた。こういった学び合いの姿が、学校にはあふれていてほしい。

そこで、昨年度の研究では、前年度におこなった国語科「書くこと」の研究を生かし、児童が自分の考えを文章として書き表すことによって認識し、それを他者と交流することによって学びを深めていくことを主題とした。研究の成果として、意見を交流しやすい場の設定のあり方や、互いの考えを伝え合うために児童が身につけておくべきスキルの整理、「伝える」ということを主眼とした「書くこと」の適切な指導など、さまざまな知見を得ることができた。しかし一方で、「活動を通して児童の考えは本当に深まっているのか」「伝え合うことが苦手な児童が置き去りにされていないか」といった課題も見えてきた。また、国語科で得られた成果を他の教科や領域でも生かすことができるのではないかと、との提案もあった。

そういった反省から、本年度はさらに「伝え合う」ということに焦点を置いて主題と視点を整理し、研究に取り組んだ。

2. 研究の趣旨

本校の児童は、学力の高い層に位置し、言葉を使って自分の考えを表現することに難なく取り組める児童がいる一方、読む力・書く力が不十分で、自分の考えをもつこと、それを書き表すことに課題のある児童も少なくない。また、自分の考えを表すことが得意な児童の中には、一つの考えに固執して他者の考えを否定しがちであったり、主張を通すことに夢中になるあまり、話し合いの本質から離れ、不必要に攻撃的になってしまったりする児童もいる。「学校」という場が本来もっているはずの、「学び合う」という機能が果たされるためには、一人一人が考えをもつ主体として存在し、さらに、共に学ぶ仲間として相手を尊重することが不可欠である。

そこで、一人一人が考えを持つことができること、それを他者と交流することでさらに深めたり広げたりすること、自分の考えが変容したことを児童自身が認識し、学ぶ力を高めていくことを目指し、さまざまな取り組みを行った。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点①意見を交流し学び合える学習過程の工夫

児童が考えをもつ主体となるために必要なことを、「学習の中で出会う（見つける）課題が、自分事としてとらえられる課題であること」「その課題を解決するにあたって必要な知識や技能を、段階的に身につけられること」「より深い学びに導く問いを自分自身に投げかけられること」とし、それぞれに対応する学習過程の工夫として、「課題設定の工夫」「学習過程の工夫」「発問の工夫」に取り組む。

視点②意見を交流し学び合える場の設定の工夫

児童が意見を交流し合うために、交流しやすい人数や形態について、最も効果的な場の設定を工夫する。

- ・ 交流の人数・形態をどのようにするか（児童につけさせたい力、考えさせたい内容などに応じて）
- ・ 授業を行う場所の物の配置、児童の動線

視点③意見を交流するためのスキルを向上させる工夫

- ・ 話し方・聞き方名人シートや話し方・聞き方レベル表などを配布したり掲示したりし、話し方・聞き方のスキルを常に意識して話し合いに取り組めるようにする
- ・ 学習過程のどの場面で使用するかによって、交流のための道具（付箋、ホワイトボードなど）を適切に選択（できるように）する
- ・ 意見交流の前に「書く」活動を入れる際には、何のために書かせるか（目的）、どのように書かせるか（形式）、何を書かせるか（内容）を意識する

視点④児童の変容（学びの深まり）を見取る評価の工夫

- ・ 考えが変わること、考えが固まることなど、多様な変容の姿を見取る
- ・ 授業の中では、ハンドサイン等での意見の表明、机間指導での見取りなどを意識的に取り入れる

4. 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

- ・ 児童が自分事として考えたくなる課題や発問を工夫することができた。
- ・ 主体的に活動できる知識・技能を習得するための学習過程を工夫することができた。
- ・ 発達段階や学習課題に応じた話し合いの形態を工夫することができた。
- ・ 話し方・聞き方レベル表や話型を活用することができた。
- ・ 出し合った意見を整理し、まとめていくツールを活用することができた。
- ・ ICTや動画など、発達段階や学習内容に応じたふりかえりの工夫により、児童自身が自己の学びを認識することができた。

（2）今後の課題

- ・ 他者の意見を共感的に受け入れる安心感のある学級づくり
- ・ 話し方・聞き方レベル表や話し方・聞き方名人シートの充実化
- ・ 意見をまとめたり交流したりするツールについてのさらなる研究